

## 平田アナウンサーの思い出

村松賢一

NHK時代、平田アナウンサーは青年将校と言われた。紅衛兵と評する向きもあった。昭和40年代のことである。時あたかもアナウンサーをめぐる環境は激変し、従来アナウンサーの聖域とされたニュース報道に、たとえばTBSでは記者出身の田英夫がキャスターとして登場し、アナウンサーにない魅力を発揮して注目を集めていた。NHKでも「リード」（読むニュース）から「トーク」（語るニュース）へが合い言葉となりアナウンサーの自己変革が迫られていた。平田さんは、そうした改革運動のまさにリーダーであった。ニュースを語って伝えるためには、アナウンサーもスタジオを飛び出して取材現場に出なければならない。「推測で物を言うな。確かめた事実だけ伝えよう」。平田さんは口を酸っぱくして言った。口調も、慇懃無礼と言われた取り澄ました調子から事実を伝える簡潔な物言いに脱却しなければならない。声も、それまでの母音を響かせるよい声では間に合わない。地声で身体全体を使って出さなければならなかった。そして、極めつけは、歌い上げる名調子から、文意に合ったイントネーションへの転換である。これら一つ一つが、名人気質の旧世代のアナウンサーにとっては耐えられないことであった。当然猛烈な抵抗にあった。しかし、平田さんはむしろこうした先輩たちに厳しかった。紅衛兵と呼ばれたゆえんである。当時、九州の大分で、「我々こそ新しい時代を先取りしているんだ」（実際、地方のアナウンサーの方が東京より先行していた部分が多かったのだが）と力みかえていた小生は、そうした平田さんたちの動きを熱い心で見守っていたのである。

その平田さん自身が試される大事件がやがて勃発した。連合赤軍浅間山荘事件。平田さんはテレビ中継席に座ったのである。しかし、NHK史上初の10時間40分という長時間中継の間、平田さんは一貫して冷静さを失わず、信条である「事実を伝える」ことを身を以って実践して見せたのである。新しいアナウンスメントの誕生であった。

その平田さんに、思いがけず本学でもご指導頂いた。幸せなことである。ご退官は確かに淋しく心細いことだが、平田さんのあの奮闘ぶりを思うといつも勇気が湧いてくるのである。平田さん、本当に長い間お世話になりました。いつまでもお元気で過ごされますように。